

国内経済情勢

概 観

経済活動は引き続きかなり高い水準にあるが、金融引締め浸透などから鉱工業出荷はこのところ増勢がいくぶん鈍化しており、製品在庫の増大から一部には生産調整の動きもみられる。設備投資についても先行指標は落着き気配を示している。

こうした需給の引きゆるみを映じて商品市況は、主力商品を中心に弱含みに推移しているが、卸売物価は季節的要因もあって微騰している。一方、消費者物価は大幅な上昇となっている。

企業の資金需要は、設備・増加運転需資が引き続き根強いうえ、在庫需資も加わって依然高水準を続けており、企業金融は繁忙に推移している。

8月の国際収支は、貿易収支の黒字幅が縮小したものの、長期資本収支が小幅の赤字にとどまったため、総合ではかなりの黒字となった。

製品在庫率はかなり上昇

鉱工業生産(季節調整済み)は、7月に前月比+0.4%と微増のあと、8月(速報)は-1.3%の減少となった。当月の減少には夏期休暇の増加も響いているが、3ヵ月移動平均値の前月比でみると、5月+2.1%、6月+1.4%、7月+1.1%といくぶん増勢鈍化がみえにうかがわれる。

8月の生産を財別にみると、一般資本財、生産財が微増したほかは各財とも減少し、とくに在庫

水準の高い品目での減少が目だった(トラック、金属製建具、カラーテレビ、小型乗用車等)。

一方、鉱工業出荷(季節調整済み)は、7月に前月比+1.1%のあと、8月(速報)は-2.7%の減少を示した。財別には、生産同様、資本財輸送機械、建設資材、耐久消費財の減少が大きかったが、その他の財も軒並みに減少した。なお、出荷を3ヵ月移動平均してみると、前月比5月+0.4%、6月+1.6%、7月+0.9%となり、生産の伸びを下回っている。

この間、鉱工業製品在庫(季節調整済み)は、前月比6月+2.4%、7月+2.2%のあと、8月(速報)も+3.7%の増加を示した。以上の結果、製品在庫率指数(101.7、船舶を除けば101.6、前月各95.5、95.4)は大幅に上昇し、とくに建設資材(金属製建具等)、生産財(鉄鋼、電子部品等)の上昇が目だったほか、耐久消費財(カラーテレビ、乗用車等)、一般資本財(トラクター等)もかなりの水準となった。

設備投資の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み)は、6月+7.7%、7月+0.4%のあと8月(速報)は汎用機械を中心に前月比-0.4%の微減となった。一方、先行指標である機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は、7月に前月比+29.9%と大幅増加のあと、8月は-11.5%の減少となり、3ヵ月移動平均値の前月比でみても5月-8.9%、6月-1.0%、7月-4.2%と落着き気配を示している。8月の減少には前月著増をみた電力からの受注の反動減が大きく響いている

が、製造業も小幅ながら減少した。

この間、労働力需給をみると、8月は新規求職が増加した一方、求人は電機、自動車等の手控えもあって若干減少したため、求人倍率(季節調整済み)は1.38倍とやや低下した(前月1.42倍)。なお、8月の現金給与支給額は、中小企業の夏期賞与の高額支給もあって前年同月比+17.4%(前月+16.8%)の伸びを示したが、このうち定期分は所定外労働時間の減少もあって+16.9%(前月+18.0%)となった。

8月の全国百貨店売上高は、前年同月比+19.7%の伸びを示したが、9月にはいつてからの東京百貨店売上高は天候の関係もあり衣料品を中心にやや伸び悩んでいる。

卸売物価は微騰

最近の商品市況をみると、重油、セメント等は堅調を続けているものの、鉄鋼が各品目ともじり安をたどったほか、繊維では合繊をはじめ人絹糸、そ毛糸等が値下がりし、非鉄金属、合成樹脂、紙等も軟調に推移している。

秋需期入りにもかかわらず、このように商品市況が弱含みとなっているのは、供給圧力の増加や金融引締め浸透に伴う先安観の台頭から、商社、ユーザー筋に仕入れ慎重化の気運が強まっているほか、自動車、家電等の関連需要鈍化の影響も見のがせない(鉄鋼、非鉄金属、合成樹脂、紙等)。

8月の卸売物価は、非鉄金属が続落したものの、繊維品が秋冬物衣料の工賃高を主因に大幅上昇をみたほか、食料品、木材・同製品等も値上がりしたため、総平均では前月比+0.2%(前年同月比+3.4%)の上昇となった。9月にはいつてからは、上記のような商品市況を映じて、鉄鋼、繊維品、非鉄金属が値下がりし、上旬は前旬比-0.1

%の下落をみたが、中旬は食料、木材・同製品の統騰が響いて+0.1%の上昇となった。

一方、消費者物価(東京)は、8月に前月比+0.5%上昇のあと、9月(速報)は秋冬物衣料を主とする被服の高騰や食料の値上がりから+2.2%(前年同月比+5.9%)の大幅上昇を示し、季節商品を除いても+1.5%(前月+0.6%)の上昇となった。

資金需要は依然高水準

9月の金融市場では、銀行券が182億円の還収超(前年発行超122億円)となった一方、財政資金は税收の好調持続などから1,223億円の払超(前年同1,918億円)にとどまった。月中の資金余剰に対し本行は短期買入債券の売戻しなどにより調整を図り、コール市場は通月さしたる引きゆるみをみせることなく推移した。なお、10月にはいつて季節的な資金余剰期のため、コール・レートは1日以降各条件物とも一律0.25%の低下をみた。

銀行券の月中平均発行残高の前年同月比増加率は、8月+19.1%のあと9月は行楽資金の還流もあって+18.2%となり、水準としてはなお高いものの、ひとところに比べ伸び率はやや低下した。

8月の全国銀行貸出は、月中4,053億円増と前年同月(4,079億円増)をわずかながら下回り、月末残高の前年比伸び率も+16.1%(前月+16.3%)に低下した。月中貸出増加額を業態別にみると、長期信用銀行が設備資金需要の強調から前年をかなり上回った(534億円増、前年比+20%)反面、都市銀行は前年同月比微増(1,822億円増、同+2%)にとどまった。また、地方銀行は前年を下回ったが(1,578億円増、同-12%)、これには前年の貸出が月末休日の関係から実勢以上に著増をみたことが大きく響いている。

一方、中小企業金融機関では、相互銀行(669億

円増、前年比-23%)、信用金庫(852億円増、前年比-13%)とも地方銀行と同様の事情から前年を下回る増加となった。

企業の資金需要は、設備・増加運転需資が引き続き根強い。え、在庫需資も加わって依然高水準が続いているが、金融機関の融資態度は都市銀行が抑制方針を維持しているほか、地方銀行、中小企業金融機関でも資金余裕の減少から慎重な態度を示す向きが目だってきている。このため、企業の資金繰りは引き続き繁忙に推移しており、中小企業でも回収条件の悪化もあってしだいに窮屈感が広がっているようである。

8月の全国銀行貸出約定平均金利は、長期貸出の利上げが続いているほか、比較的低利の決算資金貸出の回収もあって、月中0.009%の上昇となった(前月同0.012%)。

この間、公社債市況は、9月にはいって決算月の関係から企業の手持債券売却がみられたこともありやや軟化した。なお、株式市況は企業業績の伸び悩み予想からこのところ低迷が続いている。

8月の国際収支はかなりの黒字

8月の国際収支をみると、貿易収支の黒字は339百万ドルと前月(375百万ドル)をやや下回ったものの、長期資本収支が延払信用供与の減少や外人証券投資の4ヵ月ぶりの流入超を主因に83百万ドルの赤字(前月同163百万ドル)にとどまったことなどから、総合収支では前月(黒字79百万ドル)を大幅に上回る178百万ドルの黒字となった。

この間、外貨準備は本行の輸入資金貸付実施に伴う円シフトもあって月中19百万ドルの増加にとどまった。なお、9月の外貨準備は月中29百万ドル増加し、月末残高は3,556百万ドルとなった。

8月の貿易収支を季節調整後でみると、輸出が船舶引渡しの落込みもあって前月比-7.1%(前月+3.2%)の減少をみたのに対し、輸入は前月比-0.2%(前月+2.7%)と高水準横ばいのため、月中の黒字幅は223百万ドルと前月(339百万ドル)をかなり下回った。

8月の輸出は、前年同月比+16.4%(前月+21.5%)と伸び率が低下した。品目別にみると、鉄鋼、自動車等が好調が続けた反面、船舶は久方ぶりに前年を下回り、テレビ、化学肥料等も低調であった。また地域別には、船舶の減少が響いた西欧向けのほか、米国向けも伸び率の低下をみている。なお、先行指標である輸出信用状接受額は、8月に前年同月比+16.1%のあと9月は+14.0%となった。

一方、8月の輸入は前年同月比では+20.3%(前月+28.4%)となった。品目別には、鉄鋼原料がこれまでほどではないものの依然高い伸びを示した反面、原油は増勢一服となり、また非鉄金属地金も価格の下落と需給引きゆるみを映じた輸入手控えから前年を下回った。なお、8月の輸入承認額は、前年同月比+29.5%(前月+29.3%)と引き続き高い水準となった。

(昭和45年10月6日)